琉球

教授　武藤虎太

本篇は全教授が本會演說會に於て中山王國と題して演說せられたるもの、今其大要を筆記して本誌に掲ぐ文字の責任は生等にあり　編輯員

緒言

琉球人士の間今猶尙家を以て世襲藩知事に擬せんと欲するの復藩論者あり支那の正朔を奉ぜ依て以て國を建んと欲するの支那崇拜論者あり日淸の羈絆を脫して古の中山王國に復せんと欲するの獨立論者ありと謂へは又何ぞ福州の琉球館に逃るゝ者の其跡を絕たさるを怪まんや又何ぞ俗間或は淸朝の正朔を奉する者あるを怪まんや抑も沖繩の地たる其地理上風俗上言語上何れの點より觀し來るも曾て帝國の版圖たるを失はず而も尙一部人士の間に諸種の說の行はるゝは何ぞや是れ或は己を得さるの事情あるか抑も亦當に然るべき所以のもの有るか

今歲七月余ば官命を奉ぜて彼地に赴き之を實地に觀、之を史料に徵ぜ之を故老に繹ね琉球古來の沿革に就き聊か與り聞くを得たり區々たる短時日固より豹皮の一班に過ぎず管見の誹は敢て辭せさる所なり

◎地理

火輪煙を吐て櫻島灣を出て大隅の佐多岬を離るれば右の方遙に竹嶋、琉黃島を望む是れ豈に治承年中平成經の流されたるの地に非すや（長門本平家物語）左は卽ち種子嶋、屋久嶋にぜて右に口之永良部嶋を望む是より口之嶋、中之嶋、諏訪瀨嶋を過て惡石嶋を望むべぜ是豈に平康賴の流されたるの地に非ずや少

く方位を南東に進めば大嶋、喜界島を得べゝ更に德之嶋、沖之永良部島、與論島を經て右に沖繩縣惠平屋嶋、伊是名島を望む時は左の方既に琉球本嶋の國頭崎を望むべし其岸に沿ひ舟行五拾哩乃ち那覇港に着す其西南九十三里、宮古島あり又西南五十里八重山嶋あり更に南行七里波照間嶋あり凡そ北緯廿四度より廿八度四十分に至り東經百二十二度五拾分より百三十二度拾分に至るの間大小島嶼點々海波の間に散落ゝ南、台灣に近邇し西は清の福建泉州に對し東西は大平洋に境す大小凡そ四拾餘嶋古來南中北の三部に分つ大嶋、喜界島等の北部諸嶋は今や鹿島縣に屬するも琉球島に屬せゝて既往三百年前まで即ち然りと爲す其蜿蜒蟠屈せる自然の情勢已に日本と地理上の連絡を有すると更に說明を要せざるべし琉球國史略に『琉球は東日本薩摩州に隣る常に交市する所の國一葦航すべし而ゝて閩を去る萬里中道止宿の地無し』と有るも地理上の關係自ら說得て明白なるものなり然らば即太古琉球と他邦との關係は如何

抑も一國開闢の事由來茫漠として其眞を知るゝと最も難し而ゝて琉球の如き載籍徵するに足らざるの地は殊に然りと爲す、上記の記する所、泡波限國知命（アハナキクニシリ）北佐奈姬命（キタシサナヒメ）開闢の談は頗る詳なるも其擬書たる世既に定論あり更に喋々を要せざるべし中山世譜及び球陽の記する所に由れば天地開闢の初、洪荒の中、志仁禮久、阿摩彌姑と稱する男女二神あり草木を植ゑ、海波を防き人物を繁殖す年を歷る久しく民口漸く蕃衍す時に天帝子と稱する人あり出でゝ群類を分ち民居を定む其長子天孫氏實に國君の始にゝて國土を經營ゝ民衆を統治す傳統二十五世德薄く政衰へ權臣利勇に弑せられ其統遂に絕ゆとあり然れども是二書たる共に慶安以後の書にして到底揣摩臆測の說たるを免れず況んや其年月を序して乙丑に起り丙午に終る凡そ一萬七千八百二年と云ふに至りては荒誕不稽亦た甚からずや享

保十六年正應九年廟祭議の時、當時の親方、親雲上等二十人議ゑて天孫氏は後人の僞擬に出づ靈牌を祭るに及ばざるべしと云ひしも亦宜なるかな、抑亦崇元寺歷代君主靈牌の中央に舜天王の位を正しくゑたるも故無きに非るべゑ而ゑて舜天王は傳說によれば爲朝の子なりと謂へば上古に於る天孫氏の事及其時代の歷史は遂に正確なる證左無きか、

或は曰く本邦太古史に於る綿積國は沖繩なり其證は彥火々出見尊、海神宮に至りゑに臺宇玲瓏とゑて雉堞整列し內前一井ありと云へるは現今中山首里城の四邊圍らすに石壁を以てゑ諸門多く金碧を加へ中門外一小池あり正殿は巍然として山巔に聳ち殆んど符を合せたるか如ゑと、然れども現今の首里城は太古の時より斯の如しと謂ふべきか今日の石碧正殿は既に數千年を經過し來れるものなるか或は曰く海神の女に豐玉姬あり其女弟に玉依姬あり豐と云ひ玉と云ふは沖繩の美稱にゑて今尙豐見城、玉城等の名ありと適々豐、玉等の文字地名に殘れりとて斯の如く速斷するを得ば、中城、兼城、等は天御中主神、思兼命の名殘を止めたるものと謂ふを得べきか或は曰く始め彥火々出見の命の井畔に見給ひし婦人は玉瓶を携へたりとあり沖繩人は圓器をまがりと云ふまり、はまがりの約まりたる音なりと圓器をまりと云ふは沖繩にも限らざるべし斯る例證は適々以て牽强附會の甚ゑきを見はすのみ上古の關係を明にするの効は更に無るべし

既に然り琉球の開闢談は遂に五里霧中を彷徨するが如きのみ文獻既に徵するに足らず是に於てか其言語及び古來の風俗を究むるの勝れるに若かざるを見るべゑ、

◎言　語

沖繩語の我本州語と相同じきは彼我の關係を說明するに充分の光明を與ふるものなり沖繩の學者羽

地按司尙象賢(雍正九年頃の人)は言語の異同より推論して沖繩最初の人は日本より渡りたる事疑無しと云へり宣野灣朝保氏亦沖繩方言考(余假りに斯く命名せり)を著はし

尙象賢羽地朝秀が書置かれたる書に竊惟者此國人生初は日本より爲渡儀疑無御坐候然者末世の今に天地山川五形五倫鳥獸草木の名に至迄皆通達せり雖然言葉の餘、相違者遠國之上久敷通融爲絶故也五穀も人同時日本より爲渡ものなれば云々と云へり誠に去事なるべし古事紀傳萬葉集など見るに日本上古の言葉今も多く殘れり云々

と云へり頃ろ Chamberlain 氏亦說を爲して曰く日本と琉球の兩語典を精較すれば其相一致すること Spain 語と Italy 語とに於るが如しされば今日の日本語よりも琉球語の方寧ろ古代日本語を代表せるものあり働詞の轉訛殊に然りと、然り本邦中古語は本土に於ては幾百年間頗る變化を受けたるも絶海の孤嶋通交稀なるより自然中古の儘(多少の轉訛は免れざれど)に存せるもの少からず抑も語言の音相通じ韻相通ずることは本州語に於て最も多し而して沖繩語を考ふるに此二者頗る多し即ち五拾音圖に於て縱に同行相通ずるものと橫に同列相通するもの是なり今沖繩語典に由て其種類を擧れば大略左の如し

ア	イ	ウ	エ	オ	
カ	キ	ク	ケ 井	コ ウ	
サ	シ チ	ス ツ スイ	セ キ、チ	ソ ク	
タ	チ	ツ ツイ	テ シ、スイ	ト トウ	スは强く發音す
テア			テイ	ド	ツイは强く發音す
ナ	ニ	ヌ ン	ネ ニ	ヌ、ン	

ハ	マ	ヤ	ラ	ワ
フア				
ヒ　フイ	ミ　ヒ、ン	𛀆	リ　イ	ヰ
フ　フウ	ム　ン	ユ　イ、	ル	ウ
ヘ　ユ、イ、フエ、	メ　ミ	𛀁	レ　ツ	ヱ　エ
ホ　フ、フヲ	モ　ム、ン	ヨ　ユ、イ	ロ　ル	ヲ　ウ、ヲ。

をはヲとウとの間

以上の五拾音圖に於て各假名の左方下部に小記せるは沖繩の通音通韻なり例へば梅をウミ禮をリイと云ふは縦に同行に通するものにて蟻をアイ菊をチクと云へるは通韻なり又一二の他の例を擧れば沖繩にて美人をチヨラカゲと云ふチはキの通韻なり卽ち淸らかな面影の轉訛えたるものなり又出をンヂと云ひンヂメシヤウレと云へるは出てませるより來れるにて是亦古言の轉訛なり

又宜野灣翁の古言考を見るに沖繩にて幾人と云ふ𪜈をイクトコロと云ふは古事記傳卷三（小註〇十六丁）に見ゆる如く貴人に用る語なり又ヲシヤアガルと云へる沖繩語は食物ちと上ることにて食とは元、物を食ふことゝなり萬葉一に

うつせみのいのちををしみ波にぬれいらごのしまのたまもかりをす

とある是のヲスは物を食ふことゝなり今尙一二便利の爲に左に序列すべ𛁈

方言	普通語	意義	出處
ソロイ°ト	ソロリ°ト	事を潜にする也	古事記傳卷十一（廿四丁）
ウハナイ°	ウハナリ°	後妻なり	古事紀傳

ソラル	キョウダイ	嗔罵なり（イカリソル）	
チユウデイ	ケフリ	兄弟なり	
チムリ	シヽマリ	尿なり	記、、
シイバイ	冷サ侍ルコト	御寒く御坐ります	
ヒヽサビコト			

是等の古語の殘れるもの頗る多きも今其一二の例を擧るのみ更に沖繩對話に由りて其言語々脈を考ふるに働詞の轉訛は頗る甚きも仔細に勘考し來れば其大体は即ち之を知るを得べし

問　當年の　砂糖は　どれ位　御買込み　なりました
クンドヌ　サタウヤ　チヤヌシヤク　ウエーイリニ　ナヤビタカ

答　昨年よりは　少なくありました
クズヤカー　イキラサヤビータシ

問　二三万　挺は　ございませう
ニサンマンケウヤ　アタルハヅデービル

答　否へ　漸く　一萬　挺　位　で　御坐ります
アヤビラシヤフヤク　イチマンチヤウヌシヤクド　ヤヽビーン

右は商用語なり遊歩部には

問　明日は　何か祭禮でも　御坐りますか
アチヤー　ヌーシマツリデース　アイガシヤビーラ

答　はい　明日は　格別の祝日で　御坐ります
ウー　アチヤー　カクビツヌヒー　ヤヽビーン

問　成程　天長節で　御坐りますか　其れでは餘程　賑ひましやう
シー　テンチヤウシツガ　ヤヽビーラ　アシセードト　ニジヤカヤヽビールハヅ

答　例年　實に　賑で　御坐ります
メーニシン　ドット　ニジヤカ　ヤヽビーン

尚其詳なることは本書に付て比較研究せば兩者類似の點は容易に之を知るを得べゝ然れども絶海の孤嶋、他との交通自ら便ならず長く獨立特行せし結果自然一種の土語方言を生じ到底內地語を以て解釋を得可らざるもの亦少からず例へば

ニヘーデービル　パッチー　シャーベル

と云ふ如き ニヘー、パッチー 等は蓋し Dialect とも謂ふべきか是等は各地方亦甚少からず例へば肥前肥後のバッテン、グサイ、の如き大阪堺地方のスルサカイ、と云ふか如き東京にて顚墜するをオッコチル、と云ふ如き、そは各地方皆之れ有り何ぞ獨り沖繩に於てのみ之を怪まんや

此外沖繩には又一種支那音と國音と混同せるものあり其一二の例を擧れば火事を謂てホーハイと呼び床下をユカシャと云ふか如き火と害と混同ゝ床と下と混同せるなり抑も中山王察度一たび明の封冊を受て以來國王の交替每に冊封使を出ゝ降て清朝に至るまで此儀曾て渝ることなく殊に清代には翰林院學士の如き知名の士其使者となり來れば天使館に寓し詩を賦ゝ文を作り風流閑雅の會を催し而して沖繩よりは每に謝恩使を發ゝ進貢船を出し接貢船を發し彼我の往來常に絶えず殊に明朝の時前後三十六姓の明人を送り清の世更に四姓を送り來て住せゝむ其人民今尚久米村に住ゝ自然支那人の一區劃を爲せり斯る勢なれば兩國語音の相混するは到底免れ得ざるべし是れ實に兩國語音の混同せし故なるべし

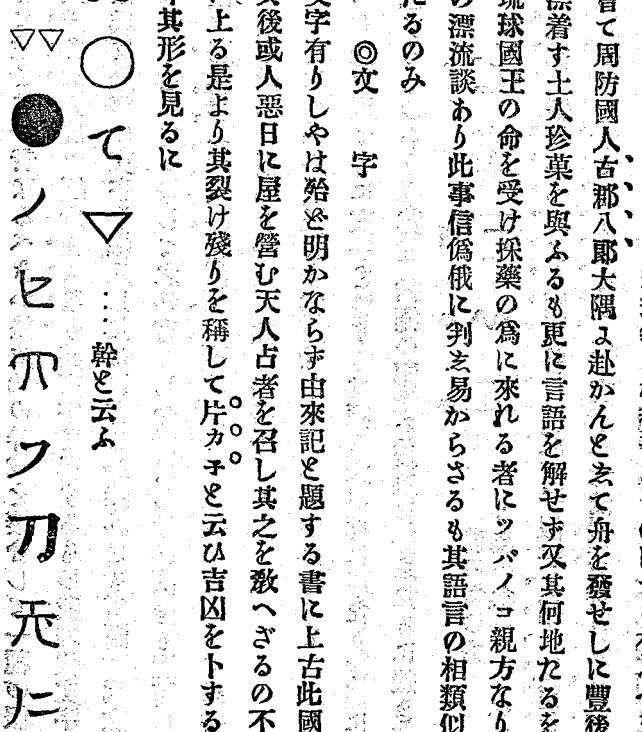
以上述へたる所に由て之を考ふれば沖繩の言語が今日一種の方言の如くなれるが如きも細かに推究ゝ來れば大抵本邦語言の轉訛せしものと謂て可なり薩摩の伊地知貞馨氏は沖繩語を分析すれば拾分の六は我邦の古言にゝて三分は其方言、他の一分は支那音との混合にして而も宮古八重山嶋の如き

は我古言最多きと是其れ或は然らんなり

彼我言語の類似此の如しされば推古帝拾六年隋主楊廣羽騎朱寛に命じ琉球を招諭せしも從はざりしかば朱寛は其布甲を取りて還りしに會々日本よりは小野妹子吉士雄成、正副使と爲りて隋に至りしが之を見て直に此れ邪久人の用ゆる所の者と云ひしことを隋書に見へたるは其交通關係の深きことを知るべく而して其邪久と云へるは琉球等を概稱せるものにても有るべきか又太田南畝の著はせる琉球年代記に曾て周防國人吉郡八郎大隅に赴かんとして舟を發せしに豐後海岸に至り暴風に遭ひ遂に與那國島に漂着す土人珍菓を與ふるも更に言語を解せず又其何地たるを知らざるに群集中より一老人來り我は琉球國王の命を受け採藥の爲に來れる者にツバノコ親方なりとて百方慰撫して琉球に伴ひ還れりとの漂流談あり此事信僞俄に判じ易からざるも其語言の相類似する傍證に供すべきを以て此に附記したるのみ

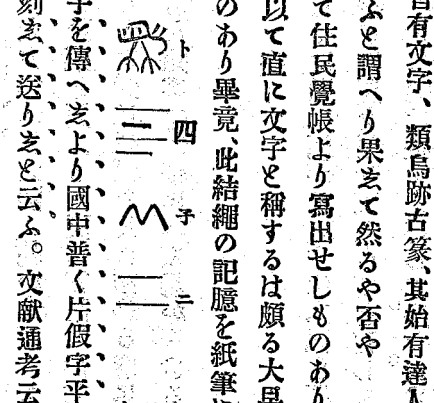
◎文　字

沖繩の上古に文字有りしやは殆ど明かならず由來記と題する書に上古此國に天人下り文字を傳ふ其類數百に及ぶ其後或人惡日に屋を營む天人占者を召し其之を敎へざるの不信切を責め怒て其文學の書を引裂て天に上る是より其裂け殘りを稱して片カナと云ひ吉凶を卜するに盡く驗あり其數、百餘を存すと云ふ今其形を見るに



幹とは母音にして枝とは子音なるべきか蓋し此の幹枝を湊合して一種の假名樣のものとなるべきか抑も沖繩にて天人と云ふは大抵外國人なり其文字と稱するもの我神代文字と稱するものに酷似する點より考ふれば或は是等の文字を輸入したるに非るか然れども所謂神代文字は朝鮮の吏道諺文乃至は梵字に類し本邦上古に於て果して之れ有りしや疑はしければ是も速斷し難きに似たり然るに閩書呂宋の條に南倭北虜、皆有文字、類烏跡古篆、其始有達人製之とありて新井白石の說に漢土にて琉球を南夷蝦夷を北夷と云ふと謂へり果して然るや否や

右の外宮古嶋字と稱して住民覺帳より寫出せしものあり然れども之は單に心覺の爲に符徵として認めしものなるべく是を以て直に文字と稱するは頗る大早計に似たり沖繩にては今尙藁を結て金錢米穀の數量を記臆するものあり畢竟、此結繩の記臆を紙筆に點ぜたるに過ぎざるのみ



中古に至り舜天王我國字を傳へしより國中普く片假字平假字を用て國語を綴り始めて明に通せし時も木簡を革縫し假字を刻して送りしと云ふ。文獻通考云、舜天依日本書、制字母四拾七、名依魯花、琉球有字自此始、今得中國書、多用鉤挑旁記、逐句倒讀、實事居上、虛字倒下讀逆、文移中參用中國一二字、上下皆國字、猶存舜天遺制とあり殊に傳說とはいへ上古天人の授けたる文字も片カナと稱するを見れば假字と云辭の決して偶然に非るを知るべしされば文章に漢字假字を雜用し贈答書翰の文皆然らざるなく漢文には必らず句讀返り點を附して逆讀するか如き何れも本邦內地と異るなし固より門閥の子弟及び久米村人は漢學を習ふこと深しと雖も書法の如き官吏等は大抵所謂御家流を學ぶと云

ふ(閩人は漢書を音讀ゑ古法帖を習ふ)

抑明太祖の時閩人三十六姓を琉球に遣はす是れ久米邑に居る一部落にゑて琉球に於ては是を以て我彼往來の文筆として之に國書の文案記錄を命せしなり後世に至り其數漸く減せしも既に明人の子孫たる以上は漢文を善くすべき筈なるに後には漸次土地風に化ゑ漢文には拙なるに至り琉國球王は屢命ゑて漢學を奬勵せしことあり固より首里、久米には(久米にては漢字を音讀す)孔廟學校等あり學術を授るも後世に至り通譯文案等充分ならざりしと見へ清朝に至り更に四姓の家を送りたることあり是等は國字慣用の久き遂に習性となり却て自國の學に拙なりしを見るに足るべく抑亦以て琉球の邦文に熟して漢文を習はざるを見るに足らんか

事情既に斯の如しされば間々漢文漢詩を善くする者有りと雖も閩人の外は僅々言ふに足らず之に反ゑて古來和歌を嗜むものは甚多く頗る聲調に諧ふもの有り琉球史料に載する琉歌集を見るに貴人より以下大抵國歌を詠せり此風傳へて今に至り毎月歌會を設けて甲乙を品隲せり斯の如く古來和歌の盛なるは國語の深習久しきを知るべく國語の素養久きは以て彼我文字の由來因緣有りゑ一現象と見ても不可無るべし

◎人種

今年帝國大學雇教師ベルツ氏は沖繩人種研究の爲に第六師團管下の沖繩兵士を調査し其支那人種と同からず寧ろ日本人種たるべきことを言へりと云ふ(下瀨氏直話)然れども其詳なることは未だ聞くを得ざれば知るに由無し然るに曾て西暦千八百拾六年(我文化拾三年)九月英國人の琉球に至りし紀行に此嶋は日本或は朝鮮人の子孫ならんと云ひしこと琉球年代記に見ゆ其後米國人波理此地に來り琉球

紀行を著はし沖繩人種を論じて曰

日本琉球兩人種は甚だ能く類似せり此兩人種は共に身長も同じく骨格頗る良く而も强壯に其色は暗赭にして間には魁偉秀美のものあり頭蓋骨楕圓形にして深目長鼻稍歐羅人に似たり前項骨楕圓にして面亦然り額高く面貌柔和愛すべし凡そ東方人種の方面なるは頰骨高きに因るも此兩人種は甚だ高からず眼は大にして光彩あり眉濃くして弓形を爲す鼻形能く適し支那人馬來人の如くに低からず孔亦大ならず口は稍大に齒廣し婦人も骨格能く釣合も細腰纖頸胸大に開け身丈稍短少に面も稍方形にして鼻も低し間々美艶なるあり因て考ふるに琉球人は元と日本と同人種にて太古の世に日本より殖民し後漂流等の事情に由り支那台灣馬來人等も少しく加はり現今の人種と混成せしなるべし凡そ日本人琉球人種の支那馬來人種に異るは鬚髯の多く剛く且つ黑きに在り支那馬來人には大抵此事無しと云々

顧ふに現今の沖繩人は或は支那台灣人等も幾分か加りて混成せしやは知る可らざれども余の直接實見に由れば內地人と沖繩人との間に大なる差違は無きが如し殊に沖繩人にして髮を斷ち內地服を着せるものは殆んど區別を爲す能はざらん

◎宗　教

琉球古來の宗教に就ては從來載籍の徵すべきもの甚だ尠し然れども古より敬神の情深く祭神は多數の神体にして古來有德者の靈を崇拜す其神を祭る所は沖繩『オガン』又は御嶽（オン）と稱し（八重山にてはオンと稱すと云ふ）或は村內に在り或は原野森林の間にあり神体は無形的のもの多く或は石を以て之に充つることあり神壇は林樹の間に在り圍らすに七五三繩を以てす沖繩にては太抵華美無れとも

八重山には之れ有り（八重山紀に往昔日本の女神當島恩島岳に來往して屢々奇端を現はすとあり）且つ八重山の三崎嶽、天川嶽、宮嶋嶽の如き拜殿あり其柱には通常聯句を掲くと云例へば（黑岩氏の說に據る）

觀空有色西方月　聽世無聲東海潮　美崎嶽

維烈昌前王　厥靈保後世　宮嶋嶽

靈露憐民　慈雲護海　天川嶽

其の祭祀を司るものは皆女子にして之を御神の司或は祝々と云ふ又略して「ノロ」と云ふ卽巫女なり齊服は白丁に等きものを着け頸に勾珠を懸け古より傳來の口碑を寫せし祭辭を朗讀す其語句は內地語の轉訛したるものなるべし中山世譜によれば天帝子三男三女を生む其長は天孫氏にして國君の始なり次は按司の始、次は百姓の始めとす長女は君々（貴族の婦女の神職を掌る者）の始め次女を祝々の始（郡村婦女の神職を掌る者）なりとあり（琉球年代記には君々は天神、祝々は海神とあり）內地にて齊宮齊院に貴顯婦女の立ち玉ひしことあり其巫女等に合せ考ふれば其類似の點を見るべし次に神靈への獻具は線香、洗米、ミキ等なりミキ御酒の事なるべし內地にては別に異りたる酒はなく神前に奠するものをば通常神酒と云へど沖繩に神酒と稱するは一種の醴にして之を製するには年齡拾五六の妙齡兒女に擂貳合を以て口を嗽かしめ精米を嚙碎きて釀すと云ふ本邦上古の釀酒法と大に相類するが如し凡て宗敎上の儀式に關する事の如きは時勢の變遷にも拘らず割合に變化少きものにて伊勢太廟の燈火に今尙燧を鑽て之を用と云へば此神酒（ミキ）も寧ろ古風を存せるには非るか、其の他祭具儀式等能く內地神敎と相類するものあり且つ婦人を以て主祭者に充つることは伊豆の靑ヶ島にて神子と云ふは八重山にて神人（カミンチュ）と云ひ伊豆にて大母と云ふは沖繩諸嶋の大阿母（オホアム）に等しと（人類學雜誌第九六號田代守定氏說）云ふ而して伊豆諸嶋は日本古風を

存すと云へは沖繩豈に獨り然らざるを得んや

次に沖繩人の神に對する概念を考ふるに彼等土人は皆天降神の後胤と稱す而して神は有德のものにして其人の魂魄は千歲不滅、吉凶禍福は皆神の所爲なり故に厚く之を敬せざるべからずと云へりされば一國一家一身の事に至るまで天災時變必らず祭り水旱癘疫必ず禱り凡そ人力の及はざる所擧げて之を神に委せざるなし卽萬有の主宰とせるなり且つ其神名には袖垂大主ありビイケリ御前あり、若カ主、渡リ神、浦掛ノ神カナシ、等內地に類せるもの尠からず而して是等は儒佛敎の傳來以前より夙に稱し來れるものなれば沖繩の宗敎が日本系統を有するは殆と疑を容れざるに似たり

現今國中所々に伊勢大神宮、八幡宮、天滿天神、熊野神社、等を祭る是等は舜天王が痛く日本諸神を信せしに始ると琉球年代記云へと果して然るや否や(今中頭なる辨ヶ岳に天孫氏の女を祀れり)或說には我寶德三年尙金福厚く神道を信せしに始まると云ふ寧ろ信ずべきが如し尤も應永三十一年に天祀宮を建てたることあり、こは海上に靈ありとて歷代の冊封使等風浪鎭護の爲め移祀せしに始まると云ふ國王は每年正月拾五日神社佛閣に詣り國家安全を禱るなり

佛敎は臨濟眞言の二宗のみ寺院頗る多く僧徒の崇拜亦厚し其始めは我弘長元年の頃僧禪鑑と稱する者舟に駕して那覇に漂着す其何國の人たるや明ならざるも時の王英、祖輔臣に命して精舍を浦添城の西に搆へて之に居らしめ極樂寺と名け之に住せしめしより佛寺の建立行はれ而して其大なるものは官寺護國寺なるべし開山住持は日本の僧賴重法印にして元中元年八月廿一日に入滅す盖し察度王時代の建立と云ふ卽ち國王の祈願所なり僧侶は淸以來其國に至るを禁せしより皆薩摩に留學し善く內地語を解す享保以後は其內地諸州行脚を禁ぜられ僅に薩摩領內をのみ旅行せりと云ふ現今佛刹の數

四拾有餘あるも眞正の佛教信者は甚だ少く明治廿六年頃高野山より出張せる僧侶の談に當時數年間盡力ゑたるも僅に三十人を得たりプロテスタントの布教者もあれど信者は學校生徒のみにて是亦三拾名に過ぎず眞宗本願寺派の地方人五拾餘名の信者を得たるは第一等と爲すべゑと（笹森氏の南島探險）されば教法を授ることは少く主に葬祭を掌るに過ぎず畢竟古來神教崇拜の念厚き爲め充分蔓延せざるなるべゑ（佛壇は其家の貧富に應じ富めるものは內地の庵寺の如き構造なり其位牌にば法名、佛名或俗姓名を記し傍に支那年號を冠す但し支那年號を用ゆることは後段に記すべし）

儒教は宗教としては論ず可らざるも其沖繩に入りしは支那の明代以降なるべしされば毎年二八月上丁の日國王は孔廟を祭ることあるもそは單に教學の爲なるべく從て一般人民が儒教の民とゑて見らるべき點は甚た少し只久米村人は由來漢人なれば其習俗自ら然らざるを得ざるべし

琉球にて往々關羽の像を床間に掲ることあり是事內地にも其例多く更に異むに足らざるが如きも沖繩は殊に多ゑ蓋ゑ清の乾隆年間の冊封使、藩王及び大臣に諭し支那の如く關帝廟を那覇に建て又毎戸其畫像を懸ることを勸諭すべゑと命せゑより然るにても有るべきか

（未完）

獨歩の呻吟

岡嶋苔雨

机に凭れて文讀むに懶く、寢ねて胸裡平かならず、懊惱良久ゑく、時辰已に二更を告げて、猶眠られず。餘りの心苦しさに衾を出でゝ窓を排けば、夜暗うゑて月も無く星も無ゑ、出でたりとて何か見ゆべき、されど、煩悶の一室に輾轉せんより、出でゝ闇夜の荒れ野に放浪して、限りなきの苦惱を忘れん